

〔直訳〕

- 44 そして あった すでに ほぼ六番目の時刻で  
そして 闇が 起こった 全体の地の上へ 九番目の時刻まで  
45 太陽が 働かなくなつて、  
だが裂かれた 神殿の幕が 真ん中で。  
46 そして 大きな声で叫んで イエスは 言った、  
「父よ、 あなたの手の中へ 私は差し出す 私の息を」。  
だがこのことを 言つて 彼は息を吐き出した。

- 47 だが見て 百人隊長は 起こったことを  
栄光を与えていた 神に 言いながら、  
「確かに この人は 正しく あった」。  
48 そして すべての この光景の故に集まっていた群衆は、  
見つめて 起こったことを、  
叩きながら 胸を 向きを変えて行つた。  
49 だが立っていた すべての 彼の知人たちは 遠くから  
そして ガリラヤから彼と一緒にいて来た女性たちは  
見ながら これらのことを。

〔新共同訳〕

- 44 既に昼の十二時ごろであつた。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。45 太陽は光を失つていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。46 イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言つて息を引き取られた。47 百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言つて、神を賛美した。48 見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰つて行つた。49 イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従つて来た婦人たちとは遠くに立つて、これらのことを見ていた。

①構成

③ 44-45節

- ⑦ 朝の6時頃から夕方の6時頃までを12等分して、時刻を数えたので、「六番目の時刻」とは昼の12時を指している。「太陽が働かなくなつて」は主文章「闇が起こった」にかかる構文であり、闇となつた理由を表している。受動形「裂かれた」は自動詞として「裂ける」の意味にもなりうるが、「神が裂いた」を意味する神的受動形と取るほうがよいと思われる。

- ④ 各段落は「だが」で始まる文章で閉じられている。ここでの「だが」はほとんど「そして」と

同じ意味で使われているが、単純な並列ではなく、新たな事柄への移行をも含み持つており、「だが」で導かれた文章が段落の要点となっていると思われる。この段落では神の介入が述べられるが、それは「闇」と受動形「裂かれた」とによって表されている。

⑥ 46 節

⑦「ここで「息」と訳した語は pneuma (霊) である。イエスは主の僕 (メシア) として受けた「霊」を父に返す。動詞「息を吐き出した」は pneuma と関連する動詞である。主の僕 (メシア) としての使命を果たし尽くしたことによって、イエスは息を吐き出し、霊を父に返すことができる。

③ 47 | 49 節

⑧ 異邦人である百人隊長はイエスの「正しさ」を認め、群衆も胸を打って「向きを変えて行った」と書いている。この群衆はイエスを十字架につけると叫んでいた人たちである。一方、イエスについて来た人たちは「見ながら、立っていた」が、それは傍観者としてではなく、証人としてである。イエスは異邦人や群衆の生き方を変えてしまうが、それを証しするのが彼らの使命である。

② 神の介入 (44 | 45 節)

⑨ ルカ 23 章 1 | 49 節では、ピラトやヘロデから尋問を受け、死刑の判決を下され、十字架上で息を引き取るイエスの姿を述べている。その最後の段落となる 44 | 49 節は、イエスの死の瞬間を描く 46 節を中心に置き、その前では神の介入が述べられ (44 | 45 節)、その後にはイエスの死を見た人々の反応が描写されている (47 | 49 節)。こうすることによって、イエスの死の意味が明らかになる。

⑩ この段落では、イエスの死の直前に起こった出来事が書かれる。昼の 12 時から 3 時まで、太陽は働きをやめ、全地は闇に包まれる。しかしこの闇は、イエスに対する闇の勝利を意味するものではない。むしろ闇は神の介入を表す象徴である。だから神殿の幕が「裂かれた」という受動形も、「神が裂いた」ことを表す婉曲表現 (神的受動態) である。旧約でも、神の介入を描写するとき、闇が立ち込めたと述べることもある (創一五 12 など)。ここでの闇が神の介入を示すとすれば、イエスの死は神の意思と無関係に起こった偶然の出来事ではないことになる。イエスの死には神が介入しているのである。そうであれば、ここでは「(全地は) 暗くなり」ではなく、「闇となり」と訳するのが良いかもしれない。

⑪ 神によって「裂かれた」神殿の幕は、最も大事な至聖所とその手前の部分を仕切っていた幕だと考えられている。旧約の時代には大祭司だけが年に一度だけこの幕を通して至聖所に入ることができた。その幕が裂かれたのは、大祭司だけでなく、すべての人が神にまみえるために至聖所に入るができるようになるためである。イエスの死は、神と民の間を隔っていた幕を取り外す出来事であった。

③ イエスの死 (46 節)

⑫ イエスは大きな声で「父よ、あなたの手の中へ私の息を私は差し出す」と叫ぶ。この言葉の背景として、詩編 31 編 6 節が考えられる。「九番目の時刻 (午後 3 時)」はユダヤ人の夕方の祈りの

時間であり、イエスの最後の言葉として引用されているこの詩編は、その祈りの言葉であると言われる。

⑥ 「息」と訳されたプネウマは多くは「霊」と訳される。神が人の鼻に命の息を吹き入れたとき、人は生きる者となったように、このプネウマが人間の生きる力の源泉となる。ギリシア語のプネウマにしてもヘブライ語のルーアッハにしても、肉体に対する霊魂という意味よりも「生命力の源をなすもの」というのが原義である。

⑦ しかし、イエスの生涯にとつて、このプネウマはさらに特別な意味を持っている。プネウマがマリヤを包むことによつてイエスの誕生は始まり (一 35)、洗礼のときにはプネウマが鳩のようにイエスに降り (三 22)、荒野野でイエスはプネウマによつて引き回されて誘惑を受け (四 1)、ガリラヤで宣教を開始するときにもプネウマに満たされていた (四 14)。イエスは「プネウマの力の中で (霊の力に満ちて)」ガリラヤへ帰るが、この句はマタイとマルコには見られない。

⑧ 誕生の時からイエスに付き添ったプネウマは、イエスにメシアとしての使命を自覚させ、それを成し遂げさせる力である。イエスはメシアとしての使命を成し遂げた今、このプネウマを父なる神へと返す。イエスの死はメシアとしての死なのである。

⑨ 「息を吐き出す」と直訳したギリシア語はエクプネオー (エクとプネオーの合成動詞) であり、「死ぬ」の婉曲表現である。プネオーは「(風が) 吹く・呼吸する」を意味し、プネウマ (風・息吹・息・霊) はこのプネオーの派生語である。イエスの死を表すのにエクプネオーが用いられているのは、イエスの最後の言葉、「私は私の息 (プネウマ) をあなたの手の中へ差し出す」と関連させているのだろう。

#### ④ 人々の反応 (47-49 節)

⑩ イエスの死の背後には神が働いている。だから、イエスの死は人々に変化を引き起こさずにはいない。この段落は、神の介入を目の当たりにした人々の変化を描いている。

⑪ イエスの死を見た百人隊長は「神に栄光を与えていた」とあるが、彼が神を賛美するのはイエスが「正しい」人だと知ったからである。「正しい」とは、単に罪を犯さなかった人という意味ではない。むしろ「神との関係の正しさ」を言い表す。神殿の幕を裂いて介入する神と、人々の代わりに (34 節) 息を差し出すイエス、その間にある深い関わりを百人隊長は見たのである。

⑫ 「正しい」と訳されるギリシア語のデイカイオスは、「正しい・公正な・正義の」を意味する形容詞である。

⑬ 古典ギリシア語としては、共同体の義務を怠らず、社会規範に従って生きる人に使われ、法的・倫理的な正しさを表した。だが、七十人訳は、この語をおもにヘブライ語ツァディークの訳語として用いる。七十人訳のデイカイオスが意味する正しさとは、個人の行いと社会規範の一致ではなく、神と人間の関わりでの正しさである。

⑭ この語は神と人間の両方に使われる。救いの業や憐れみや裁きなど、神が神と呼ばれるにふさわしく人間に振る舞うとき、神は「正しい」と言われる (イザ四五 21、五一 5 以下など)。その神に人間がふさわしく振る舞うとき、人間は「正しい」と言われる (ハバニ 4 など)。新約聖書も七十人訳の意味に従うことが多い。

⑮ デイカイオスは、イエスはメシアだと告白する人の言葉に使われる。47 節ではイエスの死を見

届けた百人隊長がイエスを正しい方と呼ぶ。使徒言行録では、イエスはメシアだと宣教する。ペトロやステファノがイエスを「正しい方」と呼ぶ(使三14、七52)。正しくない者のために苦しみ(1ペト三18)、父のもとで弁護者となった(1ヨハ二1)キリストが、正しい方と呼ばれる。

④続いて登場する群衆は、イエスを十字架につけよと叫んだ人々である(二三21・23)。しかし彼らは「胸を叩きながら向きを変えて行った」。この方向転換は、彼らの生き方の転換をも示している。「胸を叩く」とは痛悔を表す動作だからである。「ファリサイ派の人と徴税人のたとえ」の中で、徴税人は「胸を打ちながら」、神に「罪人のわたしを憐れんでください」と祈る(二八13)。

⑤「知人たち」、また「一緒について来た女性たち」は遠くからこの出来事を見ている。彼らは、イエスの死が神と民の関わりを確実に変えてゆくことの証人である。直接に目撃することのできない後の世のキリスト者に代わって出来事を「見た」証人である。ルカは救いの出来事を証しする「証人」を重視する。それが49節冒頭の「だが」によって暗示されている。

⑥「遠くから」は距離的な遠さだけではなく、心理的な遠さも表す。徴税人は神殿で「遠くに」立つて祈り(ルカ一八13)、ペトロは逮捕されたイエスに「遠く離れて」従った(ルカ二二54)。しかし、ここでの「遠く」はイエスとの関係が薄れたことを表すのではない。「遠く」はイエスに起きた一切の出来事を見渡すための位置であり、イエスの知人とガリラヤからイエスと一緒に来た女性たちはすべてを「見て」証人となる。「立っていた」と直訳した動詞は「立つ」という姿勢よりも、単に「いる」という意味を表すこともあるが、転義して「しっかり立つ」という意味で用いられることもある。ここでも単にその場に「立っていた」ということ以上の意味があると思われる。

### ⑤ 神と民が一つになる

⑦ 神殿の垂れ幕が裂けるという出来事は、マルコとマタイではイエスが息を引き取った後に起こる。(マコ一五38、マタ二七51)。しかし、ルカではイエスの死の前に、神は神殿の幕を裂くという形で介入する。イエスの死によって神と人とを隔てる幕が取り除かれ、新しい関係が始まることを神は告げている。イエスの死を中央にして、この神の介入と人々の反応が対置されている。

⑧ イエスは最後に「父よ、あなたの手の中へ私の息を私は差し出す」と叫ぶ。神が与える霊の導きを信頼し、神からの使命を自らの命をかけて果たしたイエスの生涯がこの言葉に凝縮されている。十字架上の最後の瞬間を通して、イエスは身をもって神への従順を示す。イエスが生きた「正しさ」こそが、神の求める正しさであることに百人隊長は気づく者となり、イエスに起こった出来事を見た群衆は神へと心に向ける者となる。

⑨ 聖書の語る「正しさ」を知るためには、「ファリサイ派の人と徴税人のたとえ」(一八9―14)を振り返るのが良いかもしれない。ファリサイ派の人は自分の模範的な信仰生活を誇る。一方、徴税人は胸を叩きながら「神様、罪人のわたしを憐れんでください」と祈る。神が正しいと認められたのはこの徴税人のほうである。このことから分かるように、神との交わりに生きる人こそが「正しい」人である。イエスは自らの息を差し出すことによって、神の子メシアとして、神との関わりを生き抜いた。そのとき、人々の罪は贖われ、神と民とは一つになる。イエスの十字架の死から目をそむけず、見つめ続けることによって、人は神との交わりに生きる者へと変えられていく。